

山田悟郎（北海道開拓記念館）

### 1. はじめに

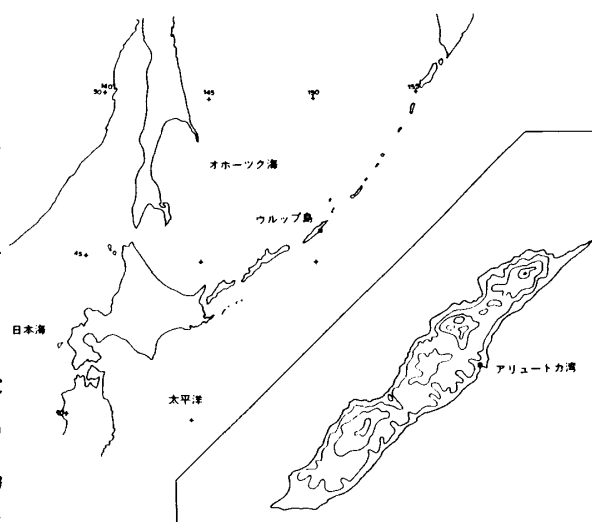
後期更新世末以降から19世紀までの北海道と大陸極東との間には、陸橋をとおした旧石器文化の流入、北海道産黒燧石の大陸への移動をはじめとした数多くの関わりが見られる。なかでも3～4世紀頃の鈴谷式土器文化の南下や、続く5～6世紀から10世紀頃の間主にオホーツク海沿岸で展開されたオホーツク文化集団の南下、それに伴った大陸系遺物の流入、その後サハリンアイヌを媒介として19世紀末まで続いた「山丹交易」による「蝦夷錦」と呼ばれた中国製絹織物、青玉の流入といった、北海道と大陸極東との間で行われた物資の移動が注目される。

現在、私が所属している北海道開拓記念館では平成2年度から5年計画で「北の歴史・文化交流研究事業」という海外交流事業を行っている。この事業の目的は、サハリン州郷土博物館、ハバロフスク州郷土博物館、ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所、中国黒竜江省文物管理委員会・同省博物館の4機関と共同で、「オホーツク文化」および「山丹交易」の実態を明らかにしようとするものである。ここでは、ロシア国内での調査結果を基に、現状の報告をする。

### 2. ウルップ島での発掘調査

1991年6月6日から25日までの20日間、サハリン州郷土博物館が主催した中部千島列島のウルップ島アリュートカ湾岸遺跡で行われた発掘調査に参加した。発掘調査にはアラスカ州コディアック島を中心として活動しているコディアック・エリア・ネイティブ・アソシエーション（KANA）やカナダ・ブリティッシュコロンビア大学の研究者も参加し、我々を含め4カ国からの参加者による共同発掘調査となった。

発掘調査が行われたのは18世紀～19世紀に千島列島開発のため入植したロシア人の遺跡で、アリュートカ湾に面した標高10m前後の段丘上と、その前面に発達した砂丘上に位置している（第1図、第2図）。千島列島開発は18世紀に入ってから、ロシア人によって設立された露米会社によって行われ、千島列島でのラッコ等の海獣狩猟のためアラスカやアリューシャン列島に居住していたコディアック・エスキモー、アリュートなどが雇用され、アリュートカ湾岸に



第1図 位置図

はロシア人の住居跡やコディアック・エスキモー等の竪穴住居跡、ウニの殻や海獣骨を主とした貝塚が残されている。

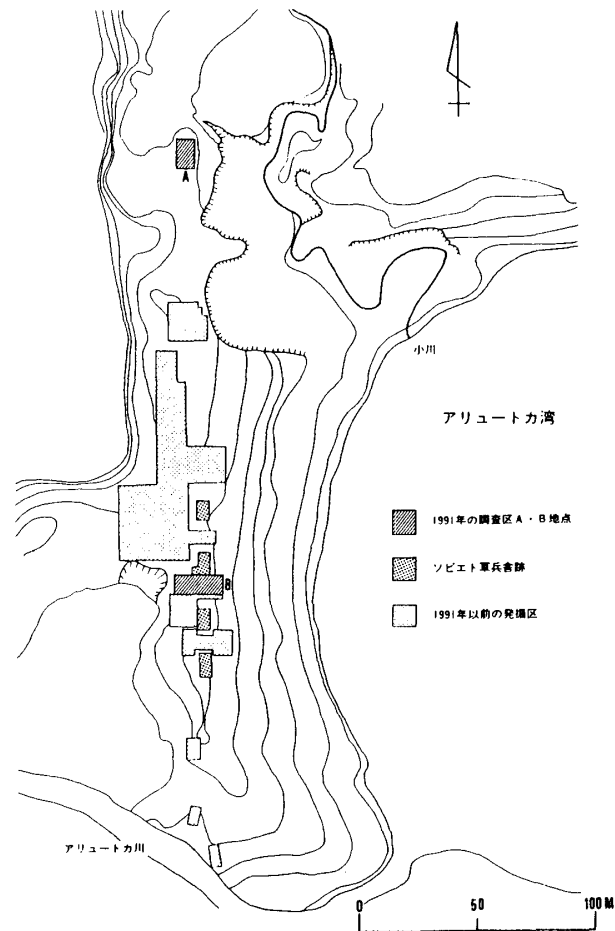
この発掘に参加するほかに、我々には同島を訪れたもう一つの目的があった。ウルップ島は1875年に締結された樺太・千島交換条約により日本領となっていたものの、1900年に締結されたオットセイ保護条約に基づき、1915年から同島を含む中部千島は海獣保護等のため民間人の立ち入りが禁止されていた。そのため、戦前には南千島と北千島には日本の考古学者が訪れて発掘調査が行われ、先史時代の大きな状況が把握されていたが、中部千島は考古学上の空白地帯となっていた。

我々としては、北海道で展開された先史文化のどの時期のものが中部千島まで分布を広げていたかを確認したいというもう一つの目的があったのである。

アリュートカ湾岸での発掘調査は1981年からサハリン州郷土博物館とソ連邦地理学協会サハリン支部によって行われており、V.O.Shubin (1985,1987,1990) や V.O.Shubin・V.O.Shubina (1986) により、18世紀から19世紀にかけて数度にわたってロシア人による開拓が行われていたこと、それは第1植民期(1768~1785)、第2植民期(1795~1805)、第3植民期(1828~1877)に区分されることが明らかにされている。

この年の発掘調査は砂丘上で行われ、内部に石組の炉をもつた4軒の竪穴住居跡、円形に浅く掘り込まれた鍛冶遺構、土壇墓などが確認されたとともに、18世紀末から19世紀のイギリス製やロシア製の陶磁器、ランプ、鉄鍋、古銭、鉛弾、鉛弾の鋳型、フリント銃用のフリント、窓ガラスの代用に使われた雲母片、皮革製品の断片などが出土した。出土した陶磁器の製作年代から、発掘された遺構・遺物は第3植民期に残された可能性が強い。

我々のもう一つの目的であった北海道の先史文化に関わる遺跡は、ロシア人の集落跡から北に約200m離れた地点の段丘上に位置していた。1981年からの発掘調査で掘り上げられた発掘区の壁面に、下部の粘土を掘り込んだ3軒の竪穴住居の断面が露出しており、床面上から土器片と石器、石片を採取することが出来た。表土から床面までは約1mの深さがあり、埋積土中には数枚のテフラが挟在していたが噴出源と噴出年

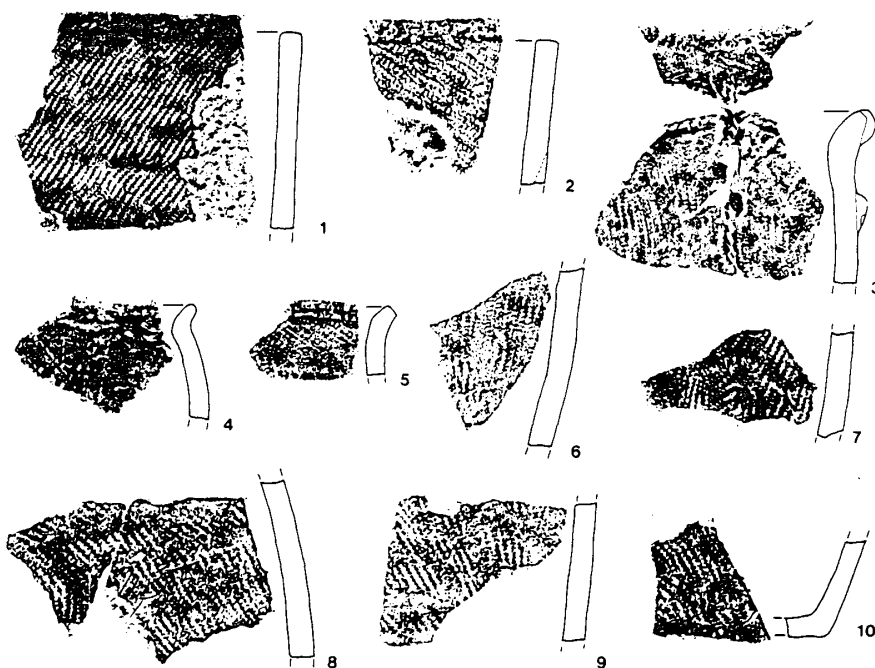


第2図 発掘区 (Aが縄縄文式土器出土地点)

代は不明である。ただ、最上部の緑灰色テフラは19世紀に造られた住居跡などの遺構直下に堆積していることから、それに近い時期の噴出と考えられる。

出土した土器片には、細かな斜行縄文が施されたものが多く、口縁部に細い縄目の圧痕が縦・斜め方向に施されたもの、波状口縁の口唇部に縄線文を巡らし、細かな斜行縄文を施文した口縁部に、口縁内部から貼瘤文の下にかけて縄線文を施したものなどがある（第3図）。その特徴から北海道東部に分布した約2,000年前頃の、続縄文時代下田ノ沢1式、同2式土器の破片であると推定されている（右代ほか、1992）。

戦前の調査により南千島のエトロフ島まで分布が確認されていた続縄文時代の遺跡は、潮流が速い海峡を越えて対岸のウルップ島まで分布していたことが確認できたのである。



第3図 ウルップ島から出土した続縄文式土器

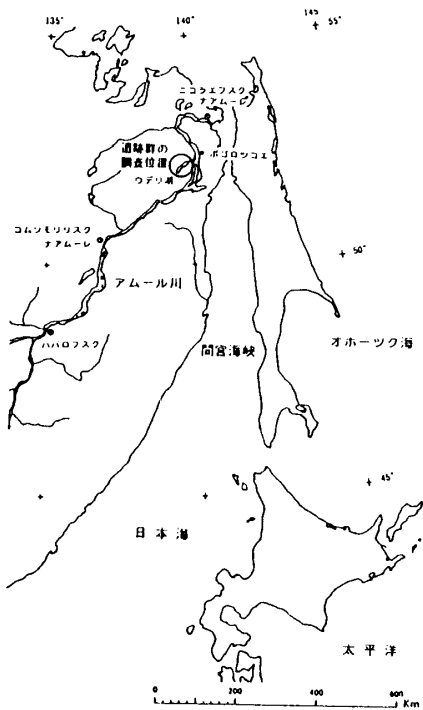
### 3. アムール川下流域での発掘調査

#### ハバロフスク

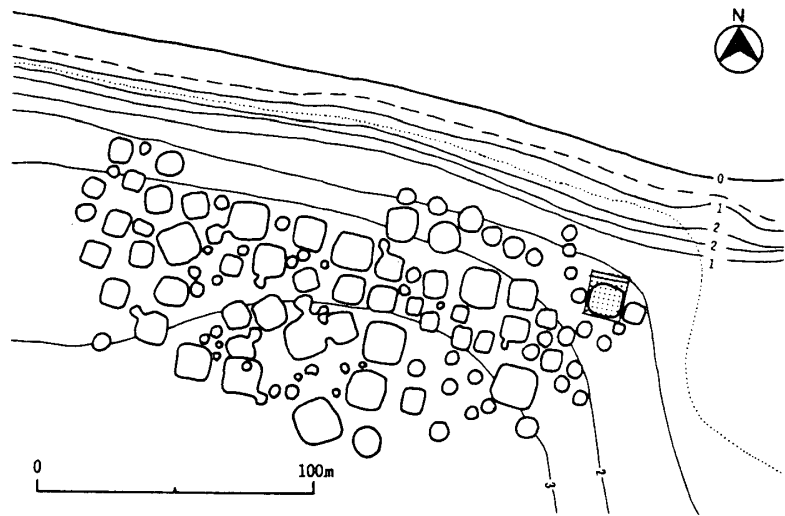
州郷土博物館が主催したアムール川下流域での遺跡発掘調査に参加するため、1992年9月中旬から10月初旬までロシアを訪れた。我々はアムール川河口で、6世紀から10世紀にかけて北海道北部、東部に展開されたオホーツク文化の形成にかかわるなんらかの手がかりが得られるのではないかという期待をもっていた。しかし、交通手段や宿泊設備が整備されていないことから、ハバロフスク市から遺跡までの往復に、宿泊可能な小型船を使用したことにより12日を要し、遺跡に滞在できたのは6日間程度であった。

発掘が行われていた遺跡はカルチョームⅢ遺跡で、アムール川河口から約200km上流の、ウデリー湖岸に位置する。新石器時代および初期鉄器時代の遺構、遺物が出土する遺跡で、シベリアカラマツが主となったタイガでおおわれた、湖に面した比高約2～3mの微高地上に約100基ほどの竪穴群が分布している（第4、5図）。

7月中旬から始められた発掘調査で、櫛目のジグザク文を施文した土器をもつ新石器時代のヴォズネセノフカ文化の竪穴住居1軒、それに重複した初期鉄器時代のウリル文化の竪穴住居1軒、発掘区の北側から新石器時代の竪穴住居の一部が確認されて



第4図 位置図



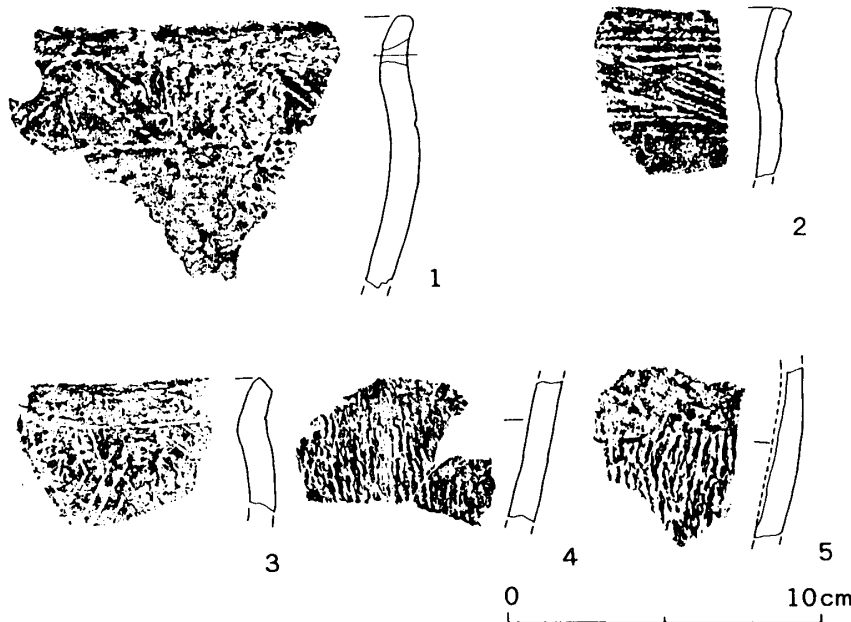
第5図 カルチョームⅢ遺跡の住居址群

いた。ヴォズネセノフカ文化の竪穴住居は円形で直径が約11m、壁沿いに低いベンチ状の構造をもつ。ウリル文化の竪穴住居は約8×8mのほぼ方形なもので、床面からは中央の炉、貯蔵穴なども確認されている。また、ウリル文化の竪穴住居は、ヴォズネセノフカ文化の竪穴住居が廃棄された後の窪地を利用して構築されたものである。

発掘区土壌断面の各層と文化期の関係は、上から各時期の遺物が混じって出土する表土のⅠ層、Ⅱ層は鉄器時代の遺物包含層である茶褐色土層、Ⅲ層は初期鉄器時代の遺物包含層である暗茶褐色土層、Ⅴ層は新石器時代と初期鉄器時代遺物の混在層である炭化物混じりの黒色土層、Ⅶ層が新石器時代の遺物包含層で、上下のⅣ層とⅥ層は増水時に堆積した黄褐色砂礫層である。

発掘がほぼ完了していたことから、我々の課題と関連するⅤ層～Ⅰ層までの各遺物包含層から出土した遺物の調査にとりかかった。紙で梱包された多量の遺物の開梱を繰り返す過程で、北海道との関係を示す5片の土器片を見つけだすことができた。Ⅰ層およびⅡ層下部の出土物中にはサハリン南部から宗谷海峡に面した北海道北部を分布圏とする、口縁部に撚紐圧痕文や刻線で菱形文様施文された鈴谷式土器片3片が、Ⅱ層中の出土物には北海道北部に分布域をもつ続縄文時代前半の撚糸文が施文された土器片2片が混じっていた。これらの土器片はウリル文化および鉄器時代の靺鞨文化系の遺物と共に掘り上げられたもので、北海道およびサハリン南部の土器文化との間になんらかの関連があったことは明かである。北海道との関係を示す土器片は第6図に示すとおりで、1～3が鈴谷式土器片で、4～5が続縄文時代前半の土器片である。

鈴谷式土器の遺跡はサハリン南部や北海道北部に分布するものの、土器は北海道中央部の江別市、札幌市、余市町などの北海道中央部の続縄文時代後半の遺跡からも出



第6図 カルチョームⅢ遺跡から出土した鈴谷式土器  
と続縄文式土器

土しており、続縄文文化の集団との間になんらかの交流があったことを示すものとなっている。鈴谷式土器の時代は約3-4世紀頃と推定されている（右代、1991）。

いくぶん後の4-5世紀頃には北海道を分布圏としていた続縄文時代後半の江別式C<sub>2</sub>、D式土器が東北地方南部まで分布域を拡大した現象がみられ、秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡では検出された6基の土

壙墓の内5基には江別式C<sub>2</sub>、D式土器が副葬されていた（小林、1991）。3-5世紀頃は吉野（1982）、Sakaguchi（1982）により相対的に寒冷であったと指摘されている時代にあたり、東北地方では津軽平野にまで達していた稲作前線が宮城県付近まで南下している。このような鈴谷式土器の南下や江別式土器の東北地方への南下は気候の寒冷化に伴ったものにとらえられてきた。

しかし、この頃には逆の現象も見られる。東北地方の弥生時代終末期の天王山式土器などが北海道中央部石狩低地帯まで北上しており（上野、1992）、江別式土器はこの頃サハリン南部にも分布域を拡大している。この場合は北上であり、アムール川下流域から出土した鈴谷式土器や続縄文時代前半の土器片も同じような流れの中で北上したものであろう。これまで、この時期には大陸文化がサハリン、北海道へと南下した可能性が指摘されていたが、北海道、サハリンを分布域とした土器文化が北上していたことが考えられることはなかったのである。

鈴谷式土器系の集団とアムール川下流を分布域とした鉄器時代のポリツエ文化または鞆鞆文化の集団との接触が、その後に出現するオホーツク文化の形成に影響を与えたことが考えられる。この時期にみられる土器文化圏の南北への拡大は、単に気候の寒冷化だけでは説明はできず、オホーツク文化の形成などを含めた今後の検討課題となっている。

なお、カルチョームⅢ遺跡のウリル文化期の竪穴床面から採取した炭化物の<sup>14</sup>C年代は1,710±30B.P.y. (TK-956)、2,040±40B.P.y. (TK-957)、ヴォズネセノフカ文化期の竪穴に伴う炉跡付近から採取した炭化物からは3,520±50B.P.y. (TK-958) といった、概ね各文化期の推定年代範囲内の年代値が得られている。

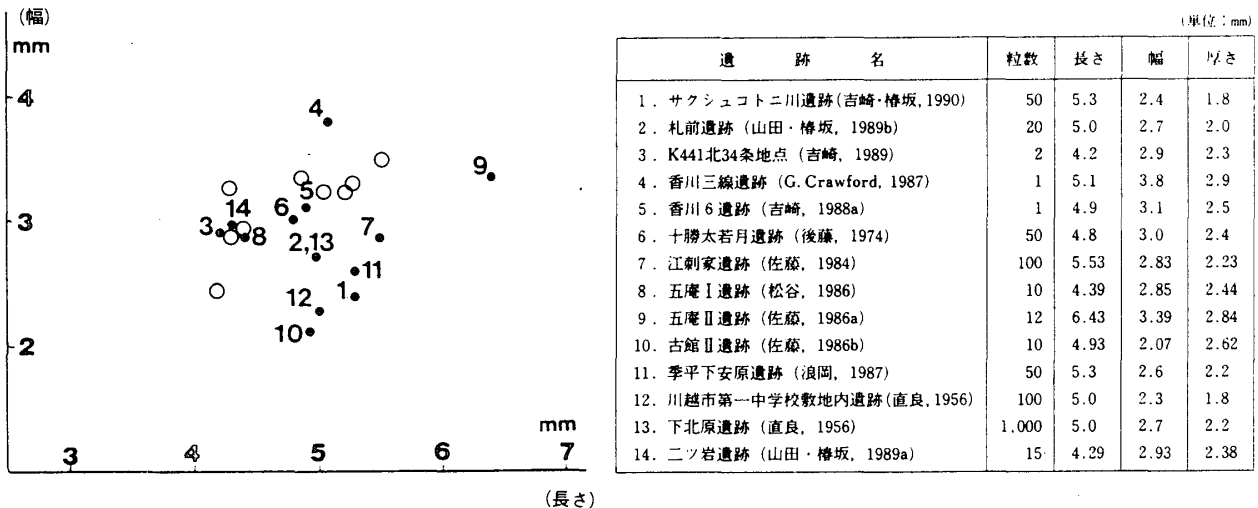
5) 女真文化期 (12-13世紀)

シャイギン・ガラディッシェからはオオムギ、コムギ、キビ、アワ、ソバ、小豆、エンドウ、ベニバナが、エカテリノフカ遺跡からはオオムギ、キビ、アワ、小豆、エンドウが、イズベスト・コバヤ遺跡からはオオムギ、コムギ、キビ、アワ、ソバ、小豆、エンドウ、ライムギが、アナニエフカ・ガラディッシェからはオオムギ、コムギ、キビ、アワ、ヒエ、モロコシ、ソバ、ライムギ、小豆、エンドウ、エゴマが出土。

上記の栽培種の内小豆についてはYanushevich (1990) により大豆とされたものであるが、大きさ及び子葉の初出葉の形態観察結果から、大豆ではなく小豆であることが明らかになったものである。また、アナニエフカ・ガラディッシェからのヒエについては、アワ・キビと分類されていたものの中に含まれていたもので、これまでヒエが出土したとした報告がなく、アワ・キビと誤認されていたものである。

これらの遺跡から出土したオオムギの計測平均値を、これまでに道内および本州東北地方出土のオオムギの計測平均値をプロットした図に記したのが第7図で、計測値からは北海道北・東部のものとほぼ同じグループにまとめることが可能である。

さて、帯金具、鐸などの青銅製品、ガラス玉、軟玉製円盤形垂飾、ブタの飼育など、それまでの北海道には見られなかった大陸文化の影響が見られるのはオホーツク文化の遺跡が出現する6世紀頃からで、オホーツク文化の要素が擦文文化に吸収される10世紀初頭頃には大陸文化の影響は薄れる。ところで、オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系の遺物のなかで、沿海地方から渡来したのものとしては渤海系とされる土器などがわずかに見られるだけで、青銅製品、ブタの飼育などを代表とする大陸系文化要素の多くは、4世紀から9世紀頃までアムール川中流域に展開された靺鞨・同仁文化のなかに見られる(菊池、1976、1978、1990)。また、加藤(1985)によると靺鞨



(番号は表の遺跡番号に対応。●北海道・東北地方、○ロシア沿海地方の遺跡出土)

第7図 各遺跡から出土したオオムギの計測平均値プロット図

#### 4. ロシア沿海地方出土の穀物と北海道北・東部出土の穀物について

明治時代まで水稲稲作栽培が行われたことがなく、農耕生産物とは無縁であったとされてきた北海道でも、最近の発掘調査の進展により8世紀から12世紀頃までの擦文時代に雑穀農耕が行われていたことが明らかにされている（吉崎、1992、山田、1993）。また、9世紀末頃の網走市二ツ岩遺跡からオオムギ、キビ、アワなどが出土し、大陸文化との関連が強く海獣狩猟・漁労を生業としていたとされていた、オホーツク文化期の集団も雑穀とは無関係ではなかった証拠も得られている（山田ほか、1991）。また、最近発掘調査されたほぼ8世紀頃と推定されるオホーツク文化の宗谷管内枝幸町目梨泊遺跡の土壌墓からは、多くの大陸系、本州系の金属器が出土したとともに、住居跡からはオオムギやキビ、アワが出土している（未報告）。

道内の遺跡から出土した多くの栽培植物の中でもオオムギについては、北海道北・東部から出土したものと、中央部および西南部からのものとは形態的特徴が異なることもあきらかとなっている（山田ほか、1991）。中央部および西南部のオオムギは、佐藤（1986a～c）、松谷（1986）、浪岡（1987）などによって報告されているような、東北地方におけるほぼ同時期の遺跡からのものと類似した計測値・形態を示すが、東・北部からのオオムギについては日本国内では殆ど類例が見られず、Yanushevich（1990）で報告されているロシア沿海地方から出土しているものに計測値・形態に類似する。したがって、北海道北・東部から出土したオオムギについては大陸との関係を含めて検討する必要があるが生じた。

幸いに1993年8月から9月までの2カ月間、ロシア沿海地方から出土した穀物が保管されているロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所に滞在し、初期鉄器時代から女真文化期までの12遺跡から出土した栽培植物遺体全てを調査することができた。

沿海地方の初期鉄器時代から女真文化までの各文化期は現在のところ下記のように編年され、各文化期の遺跡からは次にあげる栽培植物が出土していることを確認した。

##### 1) ヤンコフスキー文化期（紀元前6～5世紀頃）

マラヤ・パドシエスカ遺跡のヤンコフスキー文化期の遺物包含層からオオムギ、コムギが出土。これについて、オリジン文化期のものであるとの指摘があった。

##### 2) クロノフカ文化期（紀元前4～紀元3世紀頃）

クロノフカ遺跡の住居内からオオムギ、コムギ、キビが、コルサコフ遺跡からオオムギ、キビが、セミ・ピヤトナⅠ遺跡からオオムギとキビ、セミ・ピヤトナⅢ遺跡からオオムギ、キビ、エゴマ、小豆、エンドウが出土。

##### 3) オリギン文化期（紀元5世紀～6世紀頃）

シニア・スカリ遺跡からオオムギ、キビが、マラヤ・パドシエスカ遺跡の当文化期の遺物包含層からオオムギが出土。

##### 4) 渤海文化期（8～10世紀）

ニコラエブスコエⅡ遺跡から小豆が、コンスタンチノフカ遺跡からコムギ、オオムギ、キビ、アワ、モロコシ、エゴマ、アサ、小豆、菜豆が出土。

文化の前身にあたる沿海地方のクロノフカ、オリギン文化に並行するアムール川中流～下流域のポリツエ文化はキビ、オオムギ、マメ類などの雑穀を栽培しブタの飼育を行っていたとしている。後に続く靺鞨文化の時代にも雑穀栽培、ブタの飼育は受け継がれていたものと考えられ、松山（1986）によると、中国の『随書』列傳 46 東夷 靺鞨の条の記載に、アワ、ムギ、キビが認められるという。アムール川中流域のポリツエ・靺鞨文化の遺跡から出土したオオムギを実見したことはないが、沿海地方のオリギン・渤海文化の遺跡から出土したものと類似した形態のものと推定される。

まだ確証には欠けるがこれまで得られた資料からは、北海道北・東部からの大陸系と推定されるオオムギは金属器、ガラス製品、ブタの飼育などと共にオホーツク文化の集団を媒介として北海道に渡来した可能性が最も強い。持ち込まれた栽培種はオオムギだけではなく、その中に北海道のみから出土するモロコシが含まれ、アワ、キビ、アサなども伴っていた可能性があるが実態は不明である。大陸系のオオムギは8世紀の目梨泊遺跡出土のものが今のところ最も古く、オホーツク文化の終末に近い9世紀末の網走市二ツ岩遺跡の時期まで同種のオオムギ利用されていたのは確かである。このタイプのオオムギはモロコシなどと共に、9世紀頃から道内各地に分布圏を拡大し雑穀栽培を行った擦文文化の集団の作物コンプレックスの中に取り込まれ、北海道北・東部の10世紀から12世紀の遺跡で栽培された可能性が強いのである。

## 5. おわりに

最近4年間にわたってロシア（旧ソ連）連邦極東地方との間で実施してきた文化交流事業の概要について述べたが、各地の博物館、研究所をとりまく状況は年を追うごとに悪化している。そのような中で我々の申し出に合意し、共同調査が実現できた背景には各地での研究者による並々ならない努力が隠れているものと思われる。

だが、考古学研究の現状をみると、編年にあたっての時代観などにまだ大きくいちがいが見られ、現在使用されている文化編年をそのまま使用するにはまだ抵抗が多い。また、遺跡発掘調査にあたって自然科学的研究をどう取り入れていくかといった面で、日本との間に大きなギャップがあり、今後、共同研究を進める過程では自然科学的な側面からの協力が必要となるであろう。

自然科学の成果を応用した各種の分析結果、遺跡から出土した雑穀や堅果・種実などを試料とした年代測定値などの資料を蓄積し、相対編年結果とも加味しながら揺るぎない文化編年を構築することが今必要とされている。北海道における雑穀農耕、そして大陸との関係についての調査を進めている者として、持ち帰ることが可能な微量な試料からの年代測定が可能なタンデトロン加速器質量分析計による<sup>14</sup>C年代測定に期待するものである。

## 引用・参考文献

加藤晋平(1985)：シベリアの先史文化と日本、333P.、六興出版



- 菊池俊彦(1976)：オホーツク文化にみられる鞆鞆・女真系遺物、北方文化研究、第10号、p.31-118、北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- (1978)：オホーツク文化の起源と周辺文化との関連、北方文化研究、第12号、p.39-74、北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- (1990)：オホーツク文化と同仁文化、古代文化、第42巻第10号、p.36-47  
財団法人古代学協会
- 小林 克(1991)：農耕社会に南下した狩猟採集民、月刊考古学ジャーナル、No.341、p.14-21、ニュー・サイエンス社
- 浪岡 実(1987)：李平下安原遺跡出土の炭化米及び炭化大麦について、李平下安原遺跡、p.481-492、青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
- 松谷暁子(1986)：五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の炭化種子について、五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書、p.436-437、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集
- 松山利夫(1986)：ナラ林帯の文化、季刊考古学、第15号、p.43-47、雄山閣出版
- Sakaguchi Y.(1982)：Climatic variability during the Holocene epoch in Japan and its causes.Bull.Dept.Geogr.Univ.Tokyo,14,p.1-27
- 佐藤敏也(1972)：鑑定および分析結果、江刺家遺跡発掘調査報告書、p.236-257、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第70集
- (1986a)：五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の穀類、五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書、p.425-435  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集
- (1986b)：出土炭化穀類、古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書、p.301-336、  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集
- V.O.Shubin(1985)：千島列島のアリユート人、サハリン州郷土博物館民族学研究、第2冊、p.14-27
- (1987)：千島列島のアリユート人の文化に関する新資料、サハリン州郷土博物館民族学研究、第5冊、p.26-35
- (1990)：千島列島における18-19世紀のロシア人集落、北海道考古学、26輯、
- V.O.Shubin and V.O.Shubina(1986)：ロシア人によるウルップ島開拓の歴史によせて(考古学研究資料による)、ソ連邦極東における考古学研究の諸問題、p.100-109、ウラジオストク ソ連邦科学アカデミー極東学術センター
- 上野秀一(1992)：北海道における天王山式系土器について—札幌市K135遺跡4丁目地点出土資料を中心に—、加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集、p.763-808
- 右代啓視・手塚 薫(1992)：ウルップ島アリユートカ湾岸出土の遺物、1991年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告、p.79-90、北海道開拓記念館

- 右代啓視(1991)：オホーツク文化の年代学的諸問題、北海道開拓記念館研究年報、  
第19号、p.23-52
- Yanushevich Z.V., Vostretsov Yu. and Makarova S.A.(1990)：沿海州における民族  
植物学的遺物、26P.、ソ連科学アカデミー極東支部歴史・考古  
・民族学研究所
- 山田悟郎(1993)：北海道の遺跡から出土した植物遺体について－堅果類を中心とし  
て－、古代文化、第45巻第4号、p.13-22、財団法人古代学協会
- 山田悟郎・樺坂恭代・右代啓視(1991)：網走ニツ岩遺跡から出土した栽培植物、  
北海道開拓記念館調査報告、第30号、p.27-38
- 吉野正敏(1982)：歴史時代における日本の古気候、気象、26、p.11-15
- 吉崎昌一(1992)：古代雑穀の検出、考古学ジャーナル、No.355、p.2-14、ニュー・  
サイエンス社

## Cultural exchange between Hokkaido and Far Eastern of Russia.

Goro Yamada (Historical Museum of Hokkaido)

Since 1991, we have been conducting survey at several archaeological sites in Sakhalin, the Kuril Island and the lower reaches of the Amur River. These surveys were made possible by the "Research project of the historical and cultural exchange of the north" between the Sakhalin Regional Museum, Khabarovsk Regional Museum, Far Eastern Division of the Russian Academy of Science, Russia and Historical Museum of Hokkaido, Japan.

In 1991, Archaeological field research was carried out by Sakhalin, Japanese, U.S.A. and Japanese archaeologists, in Urup Island. The site is located on the west coast of Aleutka Bay along the Pacific coast of Urup Island. The site was occupied by Aleuts and Kodiak Eskimos who had been relocated by the Russian-American Company in the 19th century. During the 1991 season, 2 site areas were surveyed, provisionally named Aleutka Bay A and B (Fig. 2).

The Aleutka Bay A collection is made up of pottery shards and lithic artifacts. These pottery shards are of the Simotanosawa-type which is chronologically assigned to the first half of Epi-Jomon cultural period.

In 1992, Archaeological and Ethnological field research was carried out by Khabarovsk Regional Museum and Historical Museum of Hokkaido in the lower reaches of the Amur River.

The site is located on the south coast of Udul Lake in the lower reaches of Amur, named Kalchom III. We excavated both a pit dwelling dating to Vosnesenovka culture (B.C. 2500 - 2,500) and a pit dwelling dating to Uril culture (B.C. 1,000 - 700) at the Kalchom III site. This site is from Neolithic period to Iron period.

It is important to notice that Susuya type and Epi-Jomon type pottery shards came from I and II layers of the Kalchom III site. They are chronologically assigned to the Epi-Jomon period in Japan. It becomes clear that Hokkaido is related to the Amur region at that time.

I consider that some cultivated plants came from Far Eastern of Russia to Hokkaido by the peoples of Okhotsk culture, with another artifacts. In 1993, I could research for cultivated plant remains that was excavated from any sites in Primorsky, Russia. These remains are preserved in Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of Far East, Far Eastern Division of Russian Academy of Sciences.

I could find one type *Hordeum* sp., it seems to resemble that was Okhotsk culture and Satsumon culture which is frequently yielded in North and East Hokkaido.